甲斐山岳

2024年3月　第15号

地蔵岳　オベリスク

公益社団法人

日本山岳会山梨支部

甲斐山岳

2024年3月　第15号

公益社団法人
日本山岳会山梨支部

甲斐山岳第15号　目次

令和5年度を振り返って……北原　孝浩…1

山行報告

金時山……荻野　重行…4
大栃山……臼田　昌美…5
茅ヶ岳と第42回深田祭……矢﨑　茂男…7
十二ヶ岳……荏原由美子…8
西沢渓谷……小宮山千彰…9
霧ヶ峰……岩間　明子…10
北穂高岳……近藤美奈子…11
第4回家族登山　吐竜の滝……手崎喜美子…13
小太郎山……小宮山千彰…14
愛鷹山……松尾みどり…15
白水山……磯野　澄也…17
大菩薩嶺……石澤　貴子…18
沼津アルプス……渡辺　和美…19
第1回雪山入門ステップアップ講習……小宮山千彰…20

公益・共益事業

第9回やまなし登山基礎講座を開催……矢﨑　茂男…22
第6回田部祭……北原　孝浩…29
第64回木暮祭……北原　孝浩…30
自然保護全国集会報告……磯野　澄也…31
第10回中部ブロック4支部交流会に参加して……遠山　若枝…32

随想・書評

学校登山を支える……矢﨑　茂男…34
講演会「これからの山岳小説」を聴講……小澤　亮…36
「蘆川の谷」を読んで（第64回木暮祭の後で）……渡辺　峯雄…37

追悼

山本　稔さん……堀口　丈夫…39
山寺　義雄さん……秋山　泉…39

新会員紹介

望月　啓治さん、遠藤　辰也さん、東条真百合さん、近藤美奈子さん、渡辺　和美さん、中田　雅弘さん……40

事務局報告……古屋　寿隆…45
会員名簿……49
あとがき……50

令和５年度を振り返って

北原　孝浩

１　はじめに

国内で新型コロナ感染症が発症した２０２０年以降支部活動も諸制約を余儀なくされましたが、令和５年５月８日に「５類感染症」に移行されましたので、山梨支部は年度計画に掲げた諸計画などを推進実施することに努めました。近年入会歴浅い支部員を中心に登山についての志向がより多様化しつつあって、支部活動にも徐々に変化が出てきた一年でありました。また、「日本山岳会創立１２０周年記念事業」の内、山岳古道調査については降積雪の季節的要因等により一部進捗が遅延状況にありますが、来る令和６年度には遅延挽回に努めなければなりません。

２　支部活動概況

支部総会　４月15日（土）に開催しました。恒例の総会後の懇親会はコロナ感染症の５類移行前で、開催場所確保ができず実施を見送りました。

新年会　１月12日（金）にサロン・ド・エクラン（甲府駅ビル）において開催しました（参加者33名）。

新入会員オリエンテーション等　５月23日（ぴゅあ総合、新入会員参加者13名）及び５月25日（甲府市総合市民会館、同７名）において実施しました。支部の生立ちや日本山岳会の設立理念（登山にとどまらず山に関する文化や自然保護精神の高揚と実践を図ること）の説明に加え、登山届の必要とその方法について説明を行いました。参加新入会員との意見交換を通じて懇親を図ることができました。また、若手支部員との懇親会を７月14日（金）サロン・ド・エクランにおいて実施しました（参加者８名）。

やまなし登山基礎講座　支部重点事業の一つであり、前年度に準じて開講しました（受講生は13名、延べ77名）。講座の概況などは後述「第９回やまなし登山基礎講座」の通りでありますが、アンケートでは、今後支部の山行行事に対し全員が参加したいこと、また半数以上の受講生がＪＡＣ入会に前向きに考えていることが判明しました。

支部山行、会員山行　計画23件（支部山行17件、会員山行６件）は天候に起因する中止が４件、リーダーの体

調不良で急遽中止した2件を除き、計画通り実施が見込まれます。参加者は2月末現在延べ111名（支部員84名、支部員外27名）であります。

第4回家族登山　昨年度に引き続き山梨県山岳連盟と共催で北杜市の清里～吐竜の滝～清泉寮周回コースで実施しました。詳細は山行報告の「第4回家族登山　吐竜の滝」の通りであります。参加者は家族16名（6家族、子ども7名、親9名）、スタッフとして13名（支部8名、本部2名、県岳連3名）の合計29名であります。

雪山入門ステップアップ講習　3件（2月1件、3月2件）は北八ヶ岳で計画どおり実施を見込みます。2月実施分1件（参加者13名、会員4名、支部員外9名）であります。

第42回深田祭　4月16日（日）に深田記念公園において式典が行われ、山梨支部は例年通り参加しました。JAC本部から参加の副会長坂井広志氏は挨拶で全国の主な山岳祭について語り、山岳祭にかかわった先人たちの精神を受け継ぎ山岳伝統文化を守って行くことの大切さを話されました。深田祭を記念して支部が毎年実施の茅ケ岳山行を実施しました（参加者10名）。

第6回田部祭　4月29日（土）に西沢渓谷西沢山荘前広場の田部重治碑前で式典が行われました（参加者14名）。主催者の挨拶の後、碑前に各支部員が献花をしました。支部恒例の西沢渓谷周回の山行を実施しました（参加者10名）。

なお、今年度から地元観光協会（山梨市観光協会三富支部）および日下部警察署主催の「西沢渓谷・山開き山岳指導所開所式」の式典日に併せて実施することになり、式典には山岳関係者を代表して山梨支部長が参列、修祓の儀などの神事で玉串奉奠をしました。この式典後例年通り西山山荘前に移動して田部祭が行われました。

第64回木暮祭　10月15日（日）前夜から降り続いた雨も正午前に止み、増富ラジウム峡の奥、金山平の木暮理太郎記念碑の前で式典が行われました（参加者27名）。主催者それぞれの代表者による挨拶の後、来賓代表としてJAC本部前副会長坂井広志氏による挨拶で「語り継ぐ山岳祭」についての言及がありました。献酒、献花、献杯の後、木暮祭恒例のミニ講演は「木暮理太郎と尾崎喜八」をテーマに矢崎茂男山梨支部理事（広報担当）が行いました。木暮祭恒例の「ほうとう食う会」は北杜市須玉町の「甲斐源氏祭」の関係で人手さけず見送られま

した。なお、式典に先立つ恒例の記念山行は前夜からの降雨のため中止となりました。

「日本山岳会創立120周年記念事業」

山岳古道調査　2つの調査対象古道（「金峰山御岳道」と「南アルプス北部山岳古道」）それぞれについて調査、実査中でありますが、降雪積雪の季節的要因等により進捗が一部遅延しています。本部から別途調査要請のあった古道調査追加2か所、「新倉～転付峠～二軒小屋」は10月30日～11月1日に実査し、「富士山吉田口登山道」は11月3日に実査しました。

引き継がれる山岳祭　JACがかかわる全国11の山岳祭のパンフレット（2024年版）作成について山梨支部関係の3つの山岳祭の作業に取り組みました。パンフレットは会報「山」2月号同封で会員に配布されました。

日本・エクアドル友好合同登山のエクアドル隊来日歓迎会　エクアドル隊の富士山登山に伴う前夜懇親会が9月4日（月）富士吉田市内で開催され、本部からの要請で支部から3名参加しました。

第10回中部ブロック4支部交流会　コロナ禍の影響で4年ぶり11月18日（土）～19日（日）に開催しました（幹事：信濃支部、於：安曇野市のビレッジ安曇野）。山梨支部からは7名が参加しました（第11回は山梨支部幹事で11月16日～17日に八ヶ岳清里高原で開催予定）。

「山梨県山岳レインジャー委託事業」　5月に日向山（探索）、6月に鳳凰三山（定経路）、および三ツ峠（探索）、7月に北岳（定経路）、および八ヶ岳三ツ頭（定経路）で実査しました。

3　在籍会員状況

支部在籍会員（会員、準会員）は過去数年70名内外で推移してきました。昨今やまなし登山基礎講座受講者の入会者があり逓増してきましたが、死亡による自然減もあって、今年度は全体として微増と言う状況でありました。

今年度は9名（会員3名、準会員から会員移行3名、準会員3名）の入会者を見込んでいます。一方死亡された会員が3名、退会された会員が2名で、結果年度末は1名増の78名と見込まれます。なお、今年度末をもって準会員期限終了となる1名は会員移行の手続き中であります。

	年度始	増　員		減　員		年度末
		入　会	準会員から	退　会	会員へ	
会　員	62	3	3	－4		64
準会員	15	3		－1	－3	14
計	77	6	3	－5	－3	78

（2月25日記）

山行報告

金時山

荻野　重行

山行日：令和5年4月8日（土）
地　図：2万5千図「関本」
行　程：御坂保健センター―公時神社―登山道―金時山山頂―金時茶屋―登山道―公時神社
参加者：平松清子、北原孝浩、臼田まさみ、荻野重行、鶴田陽子、岩間明子

箱根の北側に位置する金時山は、箱根外輪山の最高峰であり、神奈川県南足柄市、箱根町、そして静岡県小山町との境にある。

朝7時に御坂保健センターに集合し、車2台に分乗し公時（きんとき）神社を目指す。リーダーが神社にお願いし駐車場所を確保してくれていた。

公時神社から登り始めてすぐに、紫のスミレが出迎えてくれた。観察と花の説明・写真撮影を行いながら登っていく。標高が上がるにつれ、白いスミレの花が見られ

るようになり、紫のスミレも花と葉の形が違う種類もあって、観察と撮影に余念がない。途中、急な斜面もあるが、花の観察を怠ることなく登って、見晴らしパーキングとの分岐に着いたところで休憩した。分岐を過ぎると、急な登りになるが、大涌谷と芦ノ湖が見える展望が開けた場所があり、煙を出している大涌谷と静かな風情の芦ノ湖を眺めた。山頂（１２１１ｍ）に到着したときはきれいに晴れ上がり、雪をかぶった富士山の大展望が迎えてくれた。

４月上旬にしては暖かく、登りは汗ばむ陽気でシャツ

まさかり標柱を囲んで

１枚となったが、山頂付近は風が強く上着を１枚羽織った。金時茶屋で名物のキノコ汁を堪能し、山頂に設置してある金太郎伝説の大きなまさかりを担いで、全員で笑顔の集合写真を撮った。有料（１００円）の男女別のバイオトイレは綺麗に管理されていて気持ちがよかった。金時山山頂ライブカメラに映る自分の姿を確認するため、「天下の秀峰　金時山」の看板の近くから茶屋方面に顔を向け、金時山ライブカメラのホームページを開いて待つこと３分、山頂に立つ自身の姿を確認できた。さほど意味のない行為かも知れないが楽しいひとときであり、満足感を感じることができた。

同じルートを下山し、最後に公時神社にお参りした。一日無事に楽しく山登りができたことに感謝して、山梨への帰路についた。

大栃山

臼田　昌美

山行日：令和５年４月９日（日）
地　図：２万５千図「河口湖西部」「石和」
行　程：花鳥山一本杉駐車場―檜峯神社―大栃山―小

栃山―花鳥山一本杉駐車場

参加者：磯野澄也、北原孝浩、大澤純二、渡辺峯雄、中村光吉、渡辺和美、臼田昌美

山梨百名山の大栃山は、長い裾野を持つことから「黒駒富士」と呼ばれる。その西尾根を地図読みで、春山縦走した。

登山口の檜峯神社の手前に、立派な鳥居「碧雲洞」がある。銅鉱石（青石）発掘跡への入口らしい。八重咲豆桜が開花直前の参道は、檜の美林だ。まず心静かに参拝し、登山道両脇のカタクリ、フモトスミレの花を探し歩く。登った分岐点鳶巣峠には、珍しい天狗のお地蔵様。更に登ると、昨夜の強風のおかげか、澄みきった青空が広がり目を奪われる。大栃山（1415m）山頂に着く。富士山がすくっと立ち上がる。南アルプス・八ヶ岳・奥秩父の大パノラマに、しばし時を忘れて山の思い出話に一時を過ごした。

残雪輝く富士を背に

さて、西尾根に向けて地図読み開始。各々、コンパスで方向を確認し、枯葉が、深々積った急坂を行く。途中、ミツバツツジに癒されつつ、倒木を避け、足元に注意を払いながらゆっくり進み、12時にお昼タイム。ここから、尾根を右方向へ進み、小栃山（1086・4m）へ。ここは三角点だけの質素な山頂である。その先、左右に別れる尾根を左方向へ進む。徐々に枯葉が少なくなり歩きやすい。途中、下から登って来た2組と出会った。このルートには、ステンレス看板が数本あり、「花鳥山1本杉へ40分」の場所は、細尾根と超急坂が危険なため、磯野リーダーに先導をお願いし、無事通過した。その後、道は明確になり、鹿避けフェンスの扉を出て畑に到着。リニア新幹線用送電鉄塔の下で、おやつタイム（珈琲と桜どら焼）。桃畑の花は、既に摘花（8割の花を摘むそうだ）されて、美味しい桃を作る準備が進んでいる。

素敵な青空の下、春山の縦走を存分に楽しんだ一日だった。参考までに、標高差登り403m・下り1028m、総歩行距離6・8㎞。皆様、お疲れ様でした。

茅ヶ岳と第42回深田祭

矢崎　茂男

山行日：令和5年4月16日（日）
地　図：2万5千図「茅ヶ岳」
行　程：深田記念公園―女岩―山頂―尾根道―深田記念公園
参加者：古屋寿隆、北原孝浩、矢崎茂男、大澤純二、大澤さな枝、渡辺峯雄、渡辺秀子、石澤貴子、大原光彦、JAC坂井広志副会長

今年も、深田祭の当日に茅ヶ岳に登った。昨秋の横尾山登山・木暮祭に続いて、本部の坂井広志副会長が参加。一日降り続いた雨も上がり、萌黄色に包まれた絶好の登山日和になった。

昨年のこの日、登山路脇で花の盛りだったフジザクラは、すでに花期を終えていた。ゆったりと平坦な道をたどって女岩手前の分岐点へ。トラロープの向こうの女岩には、昨日の大雨が小滝となって落ちている。ここからは俄然急登となるが、午後1時半開始の深田祭に遅れないためには、ペースを上げなければならない。

稜線でひと息入れて、深田氏終焉の地へ。朽ちかけた標柱の左に新しい石碑が建っている。平成9年に、山梨支部の故山村正光さんらが深田氏を偲んで建立したものである。

山頂は今年も賑やかだった。一昨日、山梨を覆った濃厚な黄砂は雨に洗われて、四周の山稜は実に明瞭である。山頂の一角で昼食と談笑。記念写真を撮って山頂を辞した。

尾根道（防火帯道）を下る。途中のミツバツツジの群落は、今年も紫色の光彩を放っていた。下山終了は12時50分。急傾斜を性急に下ったため、「結構膝に来たねえ」との苦笑いが起きた。

五月晴れの茅ヶ岳山頂

第42回深田祭は午後1時30分から、記念碑の建つ深田公園で開催された。実行委員会会長の内藤久夫韮崎市長のあいさつに続いて、

坂井副会長がスピーチ。山岳文学者・深田久彌の功績に触れた後、各地で開催されている山岳祭の状況と意義について解説した。また全国の12の山岳祭の内の３つが山梨県で開催されていることに触れ、山岳文化継承・発展の拠点として、深田祭はじめ山梨の山岳祭への期待を述べた。各団体の献花では、石澤会員が支部を代表して行った。

十二ヶ岳

荏原　由美子

山行日：令和５年４月23日（日）
地　図：２万５千図「河口湖西部」「鳴沢」
行　程：河口湖長浜登山口―毛無山―十二ヶ岳―毛無山―長浜登山口
参加者：荏原由美子、小宮山千彰、大澤純二、上田謙治、相川修、近藤美奈子

河口湖町長浜集落の東光寺の脇を通り登山口に着く。このルートはあまり人が入らないので、静かであり所要時間も短縮できる。参加者のお一人上田さんが詳細な地図を準備してくれた。「この時期、運が良ければクモイコザクラが咲いている」との情報に歓声が沸いた。

毛無山へは標高差６００メートル程。四方山話に花を咲かせたり、急坂を励まし合って登ったりしながら毛無山に着いた。眼下に西湖の湖面が青い。正面には富士山が聳え立っているはずだが、あいにく山頂には雲がかかっていた。

ここから十二ヶ岳まで大小の岩峰が並ぶ。岩場、鎖・ロープのフィックスが次々に現れ、緊張の連続だ。一ヶ岳、二ヶ岳・・・。中には無理やり名付けたようなピークもある。九ヶ岳だけ見つからないのは、危険回避のためルートが巻き道になっているためらしい。その謎の九ヶ岳周辺の岩場のあちこちに、なんと可憐なピンクのクモイコザクラが群生していた。皆で夢中で写真を撮る。今回

山頂の憩い

遠く長野から参加してくれた近藤さんには、スペシャルプレゼントとなった。可憐な花と岩場の緊張と爽快感。十二ヶ岳への稜線は、訪れる登山者をいつも楽しませてくれる。

無事山頂に着くと、富士山も顔を出してくれた。おいしく楽しい昼食の後はクライムダウンが待っている。周回ではなくピストンだとグレードがアップする。クモイコザクラ、フジザクラを愛でながら、無事登山口に下山した。

「山はひとで決まる」という言葉を、今回も身に染みて感じた楽しい登山であった。いろいろな下調べをしてくれた上田さん、たくさんの写真を撮ってくれた大澤さんを始め、参加者の皆さんに感謝したい。

西沢渓谷

小宮山　千彰

山行日：令和5年4月29日（土）
地　図：2万5千図「金峰山」
行　程：蒟蒻館前駐車場―東沢山荘横バス停（西沢渓谷開山祭）―西沢山荘前田部重治文学碑（田部祭式典）―渓谷道―旧森林軌道終点―ネトリ広場―東沢山荘前・解散
参加者：北原孝浩、小宮山千彰、古屋寿隆、大澤純二、磯野澄也、臼田昌美、大原光彦

奥秩父を開拓し、優れた文学的紀行文でこの山域を世に紹介した田部重治氏の遺徳を偲び感謝の念を持って開催される「田部祭」も6回目である。今年は例年と違い「西沢渓谷山開き」と同日に行うこととなった。

午前8時30分から山開きが行われ、その後新緑の中を西沢山荘前田部重治文学碑に移動して、11時から田部祭が開催された。文学碑の前で、山梨市観光協会三富支部の雨宮支部長から田部氏の笛吹川の渓谷遡上に思いを寄せるあいさつがあり、その後参加者全員で碑前に献花し碑前祭が終了した。碑に記されている「笛吹川を遡る」の一文は何度読んでも名文だと感心するが、山靴を模したという石碑が、「車」に見えるのは自分だけだろうか。

碑前祭が終わり渓谷の周回に出発した。個人として田部祭に参加した会員ら7名も合流して大人数のパーティーとなった。渓谷の水量は豊富であり、透き通った水と周りの新緑が素晴らしく天気にも恵まれて順調に渓谷沿いの道を遡って行った。女性たちは途中の岸壁に咲

いている高山植物に目を奪われて写真を撮っていた。途中の開けた河原でお昼にしたが食べ物を分け合う光景はいつもの山行と変わらない。渓谷道の上部が崩落しているため途中から仮設道に移り、滑りそうな急坂を慎重に登って旧森林軌道に出た。ここから軌道終点まで歩くと、七ツ釜五段の滝が俯瞰できる場所がありゆっくり休憩した。

帰路の旧軌道沿いはシャクナゲが満開で素晴らしい花の道であった。鶏冠山をはじめ奥秩父の山々の主脈が一望できる展望台で山座同定を行った。ネトリ広場で山の神に無事下山のお礼を述べて、東沢山荘前の駐車場に戻った。そこで解散式を行い記念山行は終了した。天候に恵まれ新緑やシャクナゲが素晴らしく、全員無事歩き通すことができた楽しい山行だった。

霧ヶ峰

岩間　明子

山行日：令和5年6月4日（日）
地　図：5万図「霧ヶ峰」
行　程：敷島総合文化会館―大平駐車場・クリンソウ群落―八島湿原駐車場―登山道―鷲ヶ峰―八島湿原―八島湿原駐車場―蓼科自由農園―敷島総合文化会館
参加者：平松清子、小宮山千彰、大澤純二、大澤さなえ、遠藤達也、荻野重行、保坂美佐子、岩間明子

本来の計画では3日に実施の予定であったが、台風2号の影響で順延となった。参加者が少なくなってしまったのは残念だったが、当日は天候に恵まれ、絶好の登山日和となった。

予定通り敷島総合文化会館に集合。車2台に分乗して八島湿原駐車場へ。ここで2名と合流し、さらに車で大平駐車場へ移動する。駐車場から緩やかな林道をしばらく歩くと開けた湿地が広がり、クリンソウの群生が見える。まさに今が見ごろの満開で、緑の中にひときわ鮮やかにピンクの花が一面に広がっていた。所々にサクラソウも咲いていて、少し青みがかったサクラソウのピンクが一層クリンソウのピンク色を引き立てていた。人がほとんど踏み入らない場所のようで、そこかしこから新芽も芽吹いていた。踏みつけないように足元を確認しながら散策を楽しんだ。

八島湿原駐車場に戻り、本日のメインである鷲ヶ峰・八島湿原を巡る緩やか登山を開始した。みるからに気持ちよさそうな稜線歩きにワクワクしながら先へと進む。途中、急なガレ場もあるが道は整備されているので歩きやすい。植物を観察しながら、ゆっくり、のんびり、写真をとりながら頂上を目指す。後方を振り返ると、下に八島湿原、車を停めた駐車場が見える。稜線からは、南アルプス、中央アルプスの山々。時折吹く風がとても心地よく、頂上から見える景色がますます楽しみになり、足取りが一層軽くなった。

植物を愛でながら

鷲ヶ峰山頂は360度の眺望で、日本アルプス、八ヶ岳、富士山、浅間山など、壮大な景観が広がる。景色を眺めながら、ゆっくりと昼休憩をとる。日常生活から離れてリフレッシュできる時間。しばらく物思いにふける。下山は八島湿原へと下る。木道沿いには黄色や紫の花が咲いている。「あれ、この花の名前はなんだっけ？　もう花の名前を忘れちゃった」と、大笑いしながら、ゆっくり、のんびりの山行が終了した。天候にも恵まれ、和やかな、とても楽しいひと時を過ごすことができた。

北穂高岳

近藤　美奈子

山行日：令和5年7月21日（金）～23日（日）
地　図：5万図「槍ヶ岳・穂高岳」
行　程：〈1日目〉上高地茶屋駐車場―上高地バスターミナル―徳澤園―横尾山荘
〈2日目〉横尾山荘―涸沢小屋―南陵―北穂高岳―北穂高小屋
〈3日目〉北穂高小屋―涸沢―横尾―徳澤園―上高地バスターミナル―茶屋駐車場
参加者：小宮山千彰、上田謙治、近藤美奈子

3年前に山を始めて以来、穂高連峰は憧れの山だった。西穂高岳は登ったことがあるが、北穂高岳は初め

て。しかも、山岳会の山行に参加させて頂けるとは。付いていけるのか、隊を乱すことがないか不安を抱えながら当日を迎えた。しかし茶嵐駐車場でメンバーの顔を見た途端、不安も吹っ飛び安心モードに。先輩方の大らかさ、人を受け容れるこころの大きさ、ユーモアに満ちた会話、どれをとってもリスペクトするばかり。

上高地は観光客が溢れていたが、歩を進めるにつれて少なくなり、平らな道をゆっくり歩く贅沢な時間。山とスキーのお師匠様から、「徳澤園のソフトクリームは必ず食べるように」と言われていた。一番おいしそうなコーヒーソフトを選んだ。

北穂高小屋にて

1日目は横尾山荘泊。外で缶ビールを飲む幸せ。しかもお風呂も入れる。ありがたいことだ。山の2段ベッドは下界の高級宿に匹敵する。多少のいびきに囲まれながらの宿泊は仕方がないと諦めた。

2日目の朝はやや睡眠不足。山荘を発ってまずは憧れの涸沢へ。壮大な穂高連峰を楽しみながらまたソフトクリームに舌鼓。聳え立つダイナミックな岩稜帯を見上げながら、神様はいると私は実感した。朝の晴れは南陵を登るにつれて曇り空に。鎖場や気を抜けないところも出てきた。しかし、我々は生ビールへ向かってまっしぐら。

そして、ついに着いた北穂高岳山頂。大展望に見とれ登頂の感慨にしばし浸って北穂高小屋へ。かわいらしい小屋である。外でいち早く生ビールを買えるのも嬉しい。別ルートから登ってきた登山者達も、皆いい顔をしている。テラスでビールを飲みながら霧を透かして見る槍のちらリズム。込み上げる幸福感。好きなことができるとは幸せである。お金も、時間も、ここまで連れてきてくれた先輩方も、自分を取り巻く環境も、健康な体と心も、本当にありがたい。様々な感謝の念を抱き、その夜もいびきに囲まれながら眠りについた。

3日目、快晴。穂高連峰がくっきりと並ぶ。先輩方に山名を教えてもらいながら下山。涸沢でまた感極まり、徳澤園では再びコーヒーソフトとカレー。上高地では登

山と観光気分を両方味わった。これが上高地のいいところである。

自宅へ着いて改めて素晴らしい山行だったことを実感した。山岳会へ入ったからこそ行けた山。先輩方、山岳会の皆様に改めて感謝するばかりである。ようし、次はどこの山へ登ろうか。

第４回家族登山　吐竜の滝

手崎　喜美子

山行日：令和５年８月11日（金・祝日）
地　図：２万５千図「谷戸」「八ヶ岳東部」
行　程：北杜市営清里無料駐車場―聖アンデレ教会―吐竜の滝―獅子岩―清泉寮―清泉寮ファームショップ―草原の散歩道―駐車場
参加者：手崎喜美子、古屋寿隆、北原孝浩、小宮山千彰、渡辺峯雄、窪田光一、大澤純二、大澤さな枝、ＪＡＣ本部２名、県山岳連盟３名、看護師１名、親子16名

国民の祝日「山の日」は、山に親しむ機会を得て山の恩恵に感謝する日。自然にふれあうとともに山の恵みを肌で感じることで、貴重な自然を理解し未来に残していくことを学ぶ日にしたい。

第４回の家族登山、今年は「吐竜の滝」ハイキングコースを選んだ。川俣川東沢渓谷の標高１２５０ｍ付近にあるこの滝は、落差10ｍ、幅15ｍの間に、小さな滝が幾筋も流れ下っている。その姿は、まるで竜が水を吐くかの様に見える為この名が付いたと言われる。

８時半に駐車場に集合。標高１０００ｍを超える清里高原の風は８月でも気持ちが良い。参加者が全員揃ってから、挨拶、準備運動をしてスタート。聖アンデレ教会を過ぎ牧草地に出たところで、八ヶ岳の鮮やかな稜線に出合って足が止まった。再び樹林帯に入ってしばらく下ると、小海線の線路を下方に見る事が出来る。沢の音と共にガタンゴトンと音が聴こえるが、電車はあっという間に過ぎ去ってしまった。写真を撮る事が出来ずに残念。何度か休憩を取りつつ１時間程で吐竜の滝に着いた。

子どもたちは思いおもいに遊んでいた。沢に手を入れたり、裸足になったり、岩を渡ったり、家族で記念写真を撮ったり・・・。真夏の日差しを浴びて火照った体には、沢の冷水が気持ち良い。

吐竜の滝を過ぎると、岩場や滑りやすい箇所、片側が切れ落ちている場所等があって注意しながら歩いていく。獅子岩橋を渡り樹林帯をつづら折りに30分程登ると清泉寮に到着。ここでお昼休憩にした。富士山や奥秩父の山々を見ながら名物のソフトクリームをいただいた。「清里の父」ポールラッシュの石碑にその功績を学んでから、清泉寮ファームショップへ下って遊具で遊び、草原を抜けて駐車場へと戻った。

吐竜の滝の涼気に包まれて

私がこのハイキングコースを初めて歩いたのは3年前。見所がたくさんで子どもも大人も楽しめると思った。今回参加してくれた子どもたちにとって、自然を楽しむきっかけになってくれたらと思う。

小太郎山

小宮山　千彰

山行日：令和5年9月9日（土）～10日（日）

地　図：2万5千図「北岳」

行　程：広河原―白根御池小屋―草すべり―北岳肩の小屋泊―北岳―北岳肩の小屋―小太郎山―草すべり―白根御池小屋―広河原

参加者：石澤貴子、小宮山千彰、大澤純二、上田謙治、近藤美奈子、手崎喜美子

今回は北岳と、派生した尾根の先にある小太郎山である。朝、芦安のバス発着所は雨の中の集合だったが、広河原に着いた時、天気は回復し晴れ間も見えてきた。

身支度を整えて出発。白根御池小屋までは樹林の中の急登が続くが、皆元気で特に女性陣は疲れを知らない。白根御池小屋で休憩し、さあ草滑りだ。長い登りが続く。辛い。いくら歩いても森林限界に着かない。他の登山者達も疲れが顔に出ている。やっと分岐に着き稜線に出て右に小太郎山を見た。岩稜を越して肩の小屋に着いたが、北岳はガスの中で何も見えず、皆で相談して北岳登頂は翌朝に行うこととした。小屋の前で生ビールを堪

能し、話が盛り上がる。小屋は快適で熟睡。夜半は満天の星だった。

朝４時、ヘッドランプで出発。岩稜を進み程なく山頂に到着。東の空が茜色に染まってくる中、雲海の彼方に富士山が峻立している、感動的な夜明けだ。小屋に戻り朝食を摂り小太郎山に向け出発。皆足取りは軽い。分岐に荷物をデポし小太郎尾根を下る。直ぐそこに見えるが、なかなか着かない。慎重に歩を進め、ようやく前小太郎山に着く。指呼の距離に山頂が見える。たどりついた小太郎山山頂は３６０度のパノラマだ。北岳、仙丈岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山・・・。小太郎山は渋い山だが魅力的な山である。

たどりついた山頂

山頂の時間をしばらく楽しんで下山する。谷風が心地よい。長い草滑りをゆっくり降り白根御池小屋へ。大休止の後、疲れた足を労わりながら広河原へ下った。今回は肩の小屋でビールをご馳走になったり、徘徊老人達がヘルパーさん達（元気な女性メンバー）に見守られたりしての実に楽しい山行だった。

愛鷹山

松尾　みどり

山行日：令和５年10月29日（日）
地　図：２万５千図「愛鷹山」
行　程：山神社―大沢橋―割石峠―呼子山―越前岳―富士見台―鋸岳展望台―富士見峠―山神社
参加者：上田健治、渡辺峯雄、大澤純二、高橋みゆき、渡辺秀子、稲富正彦、岩田晴子、黒沼英美、庭野美恵、藤原正江、石川千嘉、中谷康司、松尾みどり、紺野会里、小栗山大介、小栗山美紀、相川修

知人からの誘いで、山梨支部の山行に参加した。地上ではまだ夏の気配が残っており、10月とは思えない暑い日々を過ごしていたが、山行の日は朝から肌寒く、寒さにまだ慣れていない私は防寒着を着込んで待ち合わせ場所に向かった。メンバーは総勢17名。山梨支部以外に多摩支部、神奈川支部、千葉支部、東京本部そして会員外と大変賑やかで、2グループに別れての出発となった。

愛鷹神社を出てゆっくり標高をあげていると雨が降り始めた。雨は降ったり止んだりを繰り返し、中々レインウェアを脱げない状況を少し残念に思ったが、東沢へ差し掛かるあたりで太陽が顔を出し、濡れた苔やまだ青い木々に光が反射しキラキラと輝いた。まるで美しい庭園の中を歩いているような情景に、雨でむしろ良かったと幸せな気持ちになった。

雲踊る越前岳山頂

割石峠へ向かう道は少し分かりにくく戸惑ったが、先頭を行くSLの案内でスムーズに呼子岳へと到着することができた。呼子岳から先は痩せ尾根のアップダウンが続き、時折現れる岩場に愛鷹山にもこのようなところがあったのだなと少し意外に思った。箱根の大涌谷を横目に何度か偽ピークに騙され「次こそ山頂?」「山頂はまだなの⁉」と話しながらやっと越前岳に到着。曇っていたため富士山は望めなかったが、駿河湾と街並みが輝いて見えた。

山頂での休憩中に会員の方から果物を頂いた。果物が美味しかったのはもちろんだが、入れ物にしていた牛乳パックのアイディアが素晴らしく、是非真似させて頂こうと思った。越前岳付近は馬酔木が群生しており、春に再訪したいと思ったが、メンバーの一人が下りながら見える鋸岳の稜線に大変興味を持ったようで、近いうちに一緒にこの山域を再訪することになりそうだ。素敵な時間を過ごすことができ、山行仲間に感謝している。

白水山

磯野　澄也

山行日：令和5年11月25日（土）
地　図：2万5千図「上井出」「富士宮」
行　程：富士川クラフトパーク第二駐車場―新稲子温泉―地蔵堂―石神峠―白水山―分岐―新稲子温泉―上稲子―井出―富士川クラフトパーク第二駐車場
参加者：磯野澄也・平松清子・北原孝浩・渡辺峯雄・岩田晴子・野中なお・渡辺秀子・植田憲弘

白水山は天子山塊南部に位置し、静岡との県境にある目立たない静かな甲斐百山の一峰である。以前、単独で下野から稲子・井出まで縦走した事もあり、当初は山梨県側からの計画にこだわったが、メンバー構成・冬季時間を勘案し、天子湖側からの縦走に変更。富士宮市側周回ルートとした。

支部山行はただ景観を楽しむだけなく、その土地の歴史・文化・植生・特産物等に触れたり、参加者同士の交流が深まったりすれば良いと考える。今回は植物に詳しい植田氏に参加頂き、シダ植物を中心に普段見慣れない世界へ誘ってもらう事とした。

登山口の新稲子川温泉には、身延道の碑があった。これは身延山の参詣ルートとして、富士宮市域には3本の道があったが、その一つのようだ。8時半発、ここから紅葉全盛の中を、のんびりと稲子川の自然風景を楽しみながら遡る。民家も何となく山梨とは異なる風情だ。いつもなら目に入らない植物に時折足を止め、説明を受け感嘆の声が上がる。

地蔵堂からが山道で、六地蔵を過ぎると樹林帯に入りあまり整備されてない分かりにくい道を行く。登山道沿いの大田和集落は消滅したのか、廃屋のみが見える。悲しげな朽ちた石仏がたたずみ、日本中で増え続ける山間地の荒廃にいにし

スギ古木立つ山頂

えの賑わいを重ねてみる。

1時間弱で石神峠に着く。林道があり石神峠線の終点になる。石仏が多数あるため、地蔵峠とも呼ばれたようだ。眼下には天子湖があるが視界は利かない。なだらかな県境を登り南進する。この南部町側の一帯の殆どの植生はスギ林だ。1時間10分くらいで白水山山頂に着く。林に囲まれ以前は全く視界はなかったものの、一部伐採され明るくなっている。昼食時間を50分程取り会話が弾む。下山は南の尾根を下り途中分岐より東の尾根に入る。この分岐点は見落としやすいので注意が必要だ。2時間後の14時40分、新稲子川温泉に下山する。

下山後、稲子川沿いの井出八幡神社・南部本郷寺のシダの観察に案内され、シダの織り成す不思議な世界に感動した。多数のプラスαのあった一日に、皆大変満足気であった。

大菩薩嶺

石澤　貴子

山行日：令和5年12月17日（日）

地　図：2万5千図「大菩薩嶺」

行　程：丸川峠駐車場―千石平―上日川峠―福ちゃん荘―富士見新道入口―神戸岩―大菩薩嶺―丸川峠―丸川峠駐車場

参加者：石澤貴子、荻原賢司、小宮山千彰、高橋みゆき、相川修、大嶽ひろ美、村田幸子、山本かおる、岩路亜野、清水純也

稜線の風22メートル予報。その風をもろに受けるのは20分程度だが・・・。そんな私の心配を、「風も経験です」とさらっと流すベテランの一言が吹き飛ばした。山に登る人ならば誰もが知っている大菩薩嶺の、しかし知る人ぞ知る富士見新道。この約一時間のバリエーションルートを楽しもうと、皆で歩き始めた。

「雪よ、岩よ、我らが宿り♪」と誰かが歌い始めた。この歌を知らない人、聞いたことがある人、歌える人、と山での話題は参加者の年代やら登山歴やら、様々なことに広がっていく。この歌の題名は「雪山讃歌」だと教えてもらった。山と歌は相性が良い。数分で世代間を縮める山の歌を、私も歌い継いでいきたいと思った。

時折風が落ち葉を舞い上げるなか、富士見新道入り口へ到着する。笹の間を歩き、渡渉を2回、ガレ場を過ぎてケルンを右折する。SLが念のためとスリングをおろ

して、各自注意しながら核心の岩場を上がる。振り返ると富士が見える。これが「富士見新道」の名前の由来かもしれない。雷岩に着いたとたんに風が止み、運良くここで昼食をとることができた。冬の太陽は温かく、目の前の富士が美しい。

このルートのもう一つの美景が、北斜面を降りたところに広がる丸川荘付近の風景だ。悠久の時を経てそこに生き続ける自然は、時間という概念を忘れさせる。日常の常識を、脳が必然に迂回する錯覚を楽しめる。

富士を背に

ここからまた長い下りが続く。途中三角の笠取山を右手に発見すると、誰からともなく笠取山計画が持ち上がる。それも良いなと思いながら、痩せ尾根に吹き上がる谷風を気持ちよく受け下山した。

沼津アルプス

渡辺　和美

山行日：令和6年1月7日（日）
地　図：2万5千図「沼津」「三島」「韮山」
行　程：本栖湖県営駐車場―沼津駅―志下公会堂―志下峠―徳倉山―横山―香貫山―黒瀬バス停―沼津駅―沼津港―本栖湖県営駐車場
参加者：磯野澄也、北原孝治、川島万里子、高橋みゆき、相川修、石澤貴子、鶴田陽子、浅利誠一郎、渡辺和美

沼津駅の南側にある沼津アルプス。今回は志下峠から徳倉山、横山、香貫山のハイキングを楽しんだ。

夜明け前、身を切る様な寒さの中、本栖湖県営駐車場に集合した。心配された天候も大丈夫。沼津駅に車を止めバスで志下公会堂前へ。静岡の暖かい空気に迎えられ、咲き誇る水仙を横目に登山を開始した。樹林帯を抜け千金岩に来ると視界が開け、綺麗な曲線の駿河湾が広がる穏やかな景色に感動した。その後アップダウンを繰り返し、時折ロープに助けられながら、少し汗ばむ気持ちの良い山歩きを楽しんだ。通称「象山」とも言われる

徳倉山。「象の背」付近は平らで更に気持ちの良い尾根歩きが出来た。

徳倉山山頂で昼食。ここでサプライズに感激！　登山用バーナーで豆餅を焼き堪能したのだが、聞けば餅はお米等材料からすべて、今回のCLの自家製とのこと。とても美味しいお餅だった。餅入りのお汁粉でお腹一杯になり、お餅のランチと食後のコーヒーとで皆、幸せそうな笑顔になった。残念だったのは、天気が良かったのに富士山は雲の中だった事である。

笑顔あふれる頂

徳倉山から横岳、香貫山には急登と激下りがあり、ロープや鎖が設置されていて有り難かった。香貫山では夏みかんを拾い、皆一つずつお土産に持って帰った。今回の縦走の最後、香貫山展望台での素晴らしい大パノラマの眺望、愛鷹山越しの富士山こそ見られなかったが、沼津市街や駿河湾が一望でき、遠くには箱根の街まで見られ圧巻だった。下山後、沼津駅までバスで戻り車で沼津港へ直行する。新鮮でボリュームたっぷりの海鮮丼に癒され皆大満足。

低山ながら、アップダウンに富んだ沼津アルプス。海の見える登山はあまり経験した事がなかったので楽しかった。また、香貫山からの大パノラマには感動しきりだった。お土産に持って帰った夏みかんは、マーマレードにして、登山の思い出と一緒に、舌つづみしながら食した。まさに身も心も満たされた楽しい山行となった。

第1回雪山ステップアップ講習

小宮山　千彰

山行日：令和6年2月4日（日）
地　図：2万5千図「八ヶ岳西部」
行　程：北八ヶ岳ロープウェイ山頂駅―坪庭―北横岳ヒュッテ―北横岳南峰―北峰―北横岳ヒュッテ―坪庭―山頂駅近くの斜面で雪訓―山頂駅

参加者：小宮山千彰、上田謙治、石澤貴子、遠藤辰也、清水真理、村田幸子、向山紀子、杉山建一、吉村優吾、清水壮伍、駒場敦、堤幸司、平田美穂子

北八ヶ岳ロープウェイ乗り場近くに全員が集合したのは9時。今回は岐阜県や滋賀県という遠方からの参加もあり、合計13名という大編成になった。ロープウェイで山頂駅まで行き、身支度を整え出発。まずアイゼンの装着で時間が掛かる。雪山初心者の方が何名かいてアイゼンの調整の仕方がわからず苦労したのである。家でしっかり予習をしてきて欲しい。

何とか装着を終え、坪庭を進む、天気は高曇りだが雪面は綺麗で皆感激だ。雪道の登攀も順調で程なく北横岳ヒュッテに到着。休憩のあとストックをピッケルに持ち替え山頂に向け出発。最後の急登を頑張って北横岳南峰に到着した。相変わらず風はあるが、強さは例年ほどでなく、「今日は微風だな」と言うと初めての皆さんは驚いていた。南峰から北峰に移動し写真タイム。ガスで蓼科山は見えず眺望は良くなかった。15分程山頂で過ごして下山する。

北横岳ヒュッテ前で昼食を摂り坪庭経由で山頂駅へ。トイレを済ませ縞枯山荘へ行く途中の斜面で雪訓を開始した。まず滑落停止訓練、基本姿勢や前方に回転してからの停止、皆雪まみれだ。この頃になると青空が見え始めた（若干の八ヶ岳ブルー）。その後ダケカンバの木を支点に確保訓練や肩確保などを体験、合間にロープの結び方などの実践を行った。

陽が傾き寒くなる前に雪訓を終了し、ロープウェイで山麓駅まで下り解散式を行った。今回は初心者の方が何名かいたが、皆雪山の虜になったらしく「冬靴を買いました」「アイゼンを買いました」などの連絡が次々に入ってきていて、次の雪山が待ち遠しいとの事。雪に親しむという目的の第1回目講習は成功したようである。

厳寒の中での訓練

公益・共益事業

第9回やまなし登山基礎講座を開催

矢﨑　茂男

第9回やまなし登山基礎講座を、9月7日から1か月にわたって開催した。山梨学院の支援が終了して2回目の開催。筆者は今回、講座全体の事務を担当した。不慣れから細かなミスも生じたが、会員各位の協力により無事に終了することができたことに感謝する。

4月・5月の理事会で実施要項を検討し、開催までの作業工程等を確認した。講座内容、会場、講師、チラシ作成、周知方法など、この段階で確認できたことにより作業が円滑に進んだと思われる。受講者募集については、各市町の図書館等の公共施設、アウトドアショップなどへのチラシ設置依頼、県広報誌・新聞への掲載、ホームページ・SNSでの情報提供など、あらゆる手段を駆使して広報を行った。その結果、13人の受講生が集まった（前回、前々回の受講生は14人）。かつては山梨学院のダイレクトメールが受講生の確保に力を発揮してくれたが、本支部が全面的に担うことになった現在、この作業は重要であるとともに負担も大きい。

講座の内容は、前回と同様である。初心者を対象に登山の基礎的知識・技術を講義するとともに、登山に伴う危険回避についても講座全体を通じて指導した。また、日本山岳会の活動理念である山の文化的側面の啓発のため、登山史や山岳文学、山岳写真等の講座も設けたが、概ね好評だった。

実践登山は2回実施。第1回は茅が岳山麓にて、地図読み・ロープワーク・セルフレスキューを指導した。第2回は高川山に登頂し、地図読み・ロープワーク・山岳写真などを含めた総合登山を実施した。いずれも受講者の関心は高く、真剣な実践登山講習となった。受講者どうし、また受講者・支部員間の親睦を深める機会として貴重であることも再認識した。

実質8回の開催（令和3年度は新型コロナの影響で中止）を重ねてきた本講座。各テーマの講師が固定していることは課題だと言えるだろう。会員一人一人が専門性を高め、積極的に講師を務める体制を整えていきたい、それが支部の力量を高めることにもつながるはずである。講座を終えての思いである。

講師の話に聞き入る受講者

アンケート集計結果

1 受講生の構成など

(1)性別

性別	人数(人)	割合(%)
男性	6	46
女性	7	54

(2)年齢

年代	人数(人)	割合(%)
20歳代	0	0
30歳代	0	0
40歳代	5	38
50歳代	3	24
60歳代	5	38
70歳代以上	0	0

(3)山岳会加入状況

加入の有無	人数(人)	割合(%)
入っている	2	15
入っていない	11	85

(4)登山の形態

登山の形態	人数(人)	割合(%)
単独登山が多い	3	23
グループでの登山が多い	6	47
単独・グループが同じくらい	2	15
無回答	2	15

(5)登山歴

年　数	人数(人)	割合(%)
3年未満	6	46
4年～9年	4	31
10年～15年	2	15
16年～20年	0	0
20年以上	1	8
その他	0	0

2 講座内容についての感想

(1)講座全体

選択肢	人数(人)	割合(%)
大変役に立った	9	70
役に立った	2	15
普通	2	15
あまり役に立たなかった	0	0
役に立たなかった	0	0

(2)講座のレベル

選択肢	人数(人)	割合(%)
ちょうどよかった(初級編)	11	85
もう少し上のレベル(中級編)	2	15
もっと上のレベル (上級編)	0	0

(3)講義の内容

選択肢	人数(人)	割合(%)
よかった	10	77
登山知識・技能・実践のみ	1	8
他の分野もあってよい	0	0
無回答	2	15

(4)講座日数、回数

選択肢	人数(人)	割合(%)
もっと多くてよい	5	38
今回程度でよい	8	62
減らした方がよい	0	0

(5)1回あたりの講座時間

選択肢	人数(人)	割合(%)
適当である	11	84
長くしてほしい	1	8
短くしてほしい	0	0
分からない	1	8

(6)実践登山

選択肢	人数(人)	割合(%)
増やしてほしい	5	39
今回程度でよい	6	46
減らしてほしい	0	0
なくてもよい	0	0
分からない	0	0
無回答	2	15

(7)ロープワーク、セルフレスキュー

選択肢	人数(人)	割合(%)
役に立った	7	54
もっと時間をかけて学びたい	2	15
興味・関心がある	2	15
役に立たなかった	0	0
興味・関心がない	1	8
分からない	1	8
その他	0	0

(8)来年度、この講座を実施する場合について

選択肢	人数(人)	割合(%)
再度受講したい	6	46
受講の考えはない	1	8
分からない	5	38
無回答	1	8

(9)「再度受講してみたい」と回答された方について、
その理由は何ですか

選択肢	人数(人)	割合(%)
さらに上の知識・技術を学びたい	4	67
理解できなかったことを再度学びたい	2	33

3 講座の周知

(1)この講座をどのような方法・手段で知りましたか

選択肢	人数(人)	割合(%)
JACのホームページを見て	1	8
図書館などでチラシを見て	5	39
人から聞いて	2	15
新聞記事を読んで	2	15
SNSを見て	1	8
その他	2	15

4 日本山岳会について

(1)関心の有無

選択肢	人数(人)	割合(%)
大いにある	3	23
ある	6	46
ない	0	0
どちらとも言えない	4	31

(2)入会について

選択肢	人数(人)	割合(%)
入りたい	1	8
前向きに考えたい	6	46
入りたくない	0	0
分からない	5	46

(3)山梨支部で実施する山行などの行事に参加することについて

選択肢	人数(人)	割合(%)
参加したい	1	8
内容によっては参加したい	12	92
参加したくない	0	0
分からない	0	0

5 自由意見

・自己流で登山をしていたが、装備をしっかりそろえることの大切さを知ることができた。
・知識や技術に触れたことで、登山に対する見方が全く変わった。山の危険についても正しく知ることができ、登山の仕方が変わると思う。
・登山は常に危険と隣り合わせ。安全な登山のために勉強を続けたい。
・山には登りたいが、自分のレベルにあった登山計画を知ることが難しい。助言がほしい。
・自然保護について、新しい知識を得ることができた。
・実践登山の中で、いろいろなお話を伺うことができた。こういう時間が大切だと思った。
・各講座の内容を、更に深めていってほしい。

6 経年アンケート集計からの考察

・受講者の性差が縮まった。
・40歳代が増加するともに、年代の幅が狭まった(40歳代～60歳代)
・受講者の登山歴は9年以下が大半を占めており、「基礎講座」の対象としてふさわしい。
・講座の内容について、有益性・レベル・内容・日数・時間など、適切であった。
・実践登山について、回数・内容ともに適切であった。ロープワークの有益性が支持された。
・再度受講したいと回答している受講者は、さらに上の知識・技術を学びたいと回答している。
・講座の周知については、チラシの各方面への配付が有効である。新聞のイベント情報(山日)の活用も続けるべきである。
・JACへの関心・入会意思・支部行事への参加意思は高まってきている。

山の日制定記念事業 2023

第9回やまなし登山基礎講座

山梨県・[令和5年度やまなしで過ごす「山の日」]関連イベント

時	日 程	内 容	講 師
①	9/7 (木)	① オリエンテーション ② 日本山岳会について ③ 山の天気と観天望気	矢崎 茂男（日本山岳会山梨支部理事 ） 北原 孝浩（日本山岳会山梨支部支部長） 小宮山千彰（日本山岳会山梨支部山行委員長）
②	9/14 (木)	① 安全安心登山の基本 ② 装備・服装・食糧	磯野 澄也（日本山岳会山梨支部副支部長） 北原 孝浩（日本山岳会山梨支部支部長）
③	9/21 (木)	① 地図読み ② 山の救急医療	荏原由美子（日本山岳会山梨支部会員） 角田 元（日本山岳会山梨支部会員・医師）
④	9/23 (土)	実践登山 1(茅ヶ岳) （地図読み・ロープワーク・セルフレスキュー）	古屋 寿隆（日本山岳会山梨支部事務局長）
⑤	9/28 (木)	① 山岳遭難（一般公開） ② 自然保護	数野 昭二（山梨県警察本部生活安全部 地域課・山岳遭難安全対策隊長） 磯野 澄也（日本山岳会山梨支部副支部長）
⑥	9/30 (土)	実践登山 2(高川山) (総合登山・山岳写真講習)	小宮山千彰（日本山岳会山梨支部山行委員長） 北原 孝浩（日本山岳会山梨支部支部長）
⑦	10/5 (木)	① 山の文学 ② 山梨の登山史 修了式	矢崎 茂男（日本山岳会山梨支部理事） 矢崎 茂男（日本山岳会山梨支部理事）

※諸事情により、講師や内容が変更になる場合があります。

会 場：甲府市総合市民会館（甲府市青沼 3-5-44・電話 055-231-1951）受付 18:30～
9/7 開講時間 19:00～21:10 3階大会議室
9/14 〃 〃 〃
9/21 〃 〃 〃
9/28 〃 〃 〃
10/5 〃 〃 〃

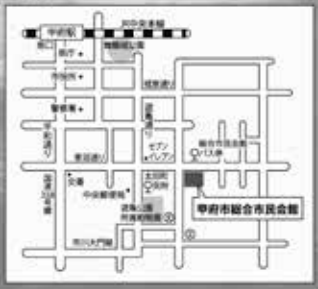
対 象：登山経験の浅い初級者、登山の基礎を学び直したい中級者で、全講座に参加できる方
定 員：30名（なお10名に満たない場合は中止します）
受講料：15,000円

★ 地図読みの地図、コンパス等お持ちでない方には別途注文を受け付けます。
★ 実践登山の交通費は自己負担をお願いします。
★ 第５回は一般公開します。
★ コロナ感染防止のためのマスク着用は各自の判断でお願いします。
★ 自家用車でご来場の方は、会場駐車場をご利用ください。

お申し込み方法：はがき・メール・ファックスで、氏名・男女の別・生年月日・〒住所・電話番号を記入して、下記にお申し込みください。

お申し込み先：
日本山岳会山梨支部 講座担当理事 矢崎茂男
〒408-0114 北杜市須玉町藤田502
メールアドレス：yazaki-s@taupe.plala.or.jp
ファックス番号：0551-42-2567
電話 090-7734-2788

お申し込み期間：7月24日～8月24日
ただし、定員になり次第締め切ります。



主催：公益社団法人日本山岳会 山梨支部

第６回田部祭

北原　孝浩

第６回田部祭は４月29日の西沢渓谷の山開きの日に行うことになったとの連絡が、山梨市観光協会三富支部長雨宮巧氏からあり、併せてその山開き式典に参列の要請があった。

令和５年度西沢渓谷山開き・山岳指導所開所式は、山梨市観光協会三富支部および日下部警察署主催により、午前８時30分から、西沢渓谷のドライブイン不動小屋北側駐車場で行われた。主催者あいさつとして雨宮氏が、「本年は今まで別の日に開催していました田部祭もこの後執り行うことになりました。田部重治さんと木暮理太郎さんがこの山域に足を踏み入れたのは、今から１１４年前のことです。金峰山から甲武信ヶ岳に至り、笛吹川の源流域に想いを馳せました。６年後の５月、笛吹川を遡り東沢を踏破し信州に至っています。そのときの感動を『笛吹川を遡る』と題して紀行文に著し、これが全国へと広まりました。田部さんは、言わば山梨市観光の大恩人であります」と述べられた。続いて、山梨県日下部警察署長進藤明氏の挨拶と、日下部警察署山岳救助隊の紹介が行われた。

その後、修祓の儀など一連の神事が行われ、参列者が玉串奉奠をした。そして登山口を清める儀が行われ、山梨市長高木春雄氏が神官から手渡された剣を手にして、登山口に張られた縄を切った。やがて、山開き式典を観ていた登山者や観光客が、一斉にこの清められた登山口を通って新緑輝く渓谷へと進んで行った。

西沢渓谷山開きに伴う一連の式典終了後、山梨支部の参加者は田部祭を行う西沢渓谷入り口の西沢山荘前に移動し、第６回田部祭に参列した。

田部祭は、西沢山荘前の西沢渓谷への下り口にある田部重治氏の文学碑前で例年行われる。雨宮支部長は「１０８年前の５月、田部重治、木暮理太郎、中村清太郎の三人がこの付近にやって来て、今とは違う淵と釜が連続する景色と異様にそびえる鶏冠山を仰ぎ見た時の感動、胸の高鳴りが聞こえて来ます。田部さんの随想「山を憶う」には『私は渓谷が好きである。笛吹川を遡行してホラノ貝の滝を初めて見た感じ、そして信州へ突破した時のそれほど渾然とした自然の彫琢の美を感じたことがない』とあり、私たちの心をも揺さぶります」と紹介された。

登山靴をイメージして作られた大きな石の文学碑には、田部氏の紀行「笛吹川を溯る」の一節、「見よ！笛吹川の渓谷は狭まりあって見上ぐるかぎり上流の方へ峭壁をなし、その闇に湛える流れの紺藍の色は、汲めども尽きぬ深い色をもって上へ上へと続いている。流れはいつまでかくの如き峭壁にさしはさまれているだろうか」が刻まれている。これは故近藤信行氏（日本山岳会員、元山梨県立文学館館長、２０２２年７月没）が撰文し、文字は田部氏の直筆原稿から拾ったのだという。また文学碑にはめ込まれている田部重治のレリーフは、２０１９年の第２回田部祭の際に彼の玄孫の田部泰一氏らによって除幕された。

田部重治文学碑の前で

主催者の挨拶の後、式典に参加した日本山岳会山梨支部員がそれぞれ白い菊の花を献花し、記念撮影をして今年の田部祭が終了した。式典後は、恒例の西沢渓谷の遊歩道周回ハイキングを実施した。

第64回木暮祭を開催

北原　孝浩

前夜から降り続いた雨もあがり、10月15日、第64回木暮祭を予定通り開催した。

木暮祭は奥秩父の山々を登山の対象として世に広く紹介した故木暮理太郎氏（明治６年～昭和19年、日本山岳会第３代会長）の遺徳を偲んで、毎年10月の第３日曜日に山梨県北杜市須玉町の増富ラジウム峡の奥、金山平の木暮理太郎顕彰碑の前で行われ（碑前祭）、今年は第１回（昭和35年）から数えて64回目になった。地元北杜市須玉総合支所増富出張所課長鈴木彰氏、公益社団法人日本山岳会からは前副会長坂井広志氏（現「引き継がれる山岳祭」プロジェクトリーダー）のほか、日本山岳会山梨支部員や山梨県内の山岳関係者多数が参加された。

碑前祭はＪＡＣ山梨支部事務局長古屋寿隆の司会進行で行われた。主催者として小森良直増富ラジウム峡観光協会事務局長、小宮山稔山梨県山岳連盟会長、北原孝浩ＪＡＣ山梨支部長がそれぞれ挨拶をした。来賓紹介に引

き続き来賓挨拶として、坂井広志前副会長が日本全国で行われている多彩な「山岳祭」についての紹介とＪＡＣとしてのかかわりについて説明された。これに関連して山梨支部長は主催者挨拶の中で木暮祭は長い歴史があり、支部の最も重要な行事の一つであることを述べた後、本日入会歴浅い会員がいるのでと断って、この木暮碑が63年前にここに設置された経緯について説明をした。献酒、献花、乾杯ののち、矢﨑茂男山梨支部理事（広報担当）が「木暮理太郎と尾崎喜八」をテーマに、木暮祭恒例のミニ講演を行った。

木暮碑を囲んで

なお、特別参加された、アルパインクライミング推進協議会代表理事菊池敏之氏からは「瑞牆山はクライミングの場として多くの者が訪ねている。日本を代表するクライミングフィールドとしてさらに整備してゆきたいと考え、山梨県や地元の関係機関にお願いをしているところである」旨の話があった。

最後に山梨県山岳連盟副会長磯野澄也（ＪＡＣ山梨支部副支部長）の閉会挨拶があり、碑前祭式典はつつがなく終了した。

自然保護全国集会報告

磯野　澄也

日本山岳会自然保護委員会・高尾の森づくりの会共催による２０２３年度自然保護全国集会が、10月21日（土）・22日（日）、八王子市高尾町タカオネにて開催された。コロナ下で中断され４年ぶりの開催となった。１泊２日で磯野・遠山、日帰りで平松・黒沼の４名が参加した。十数年前に西湖にて開催された全国集会では、北岳草スベリのニホンジカ被害状況を報告した。残念ながら、あれから状況は更に悪化している。

全国集会の主題は「人と森とのかかわり」である。１日目が基調講演・支部報告・懇親会、２日目は高尾山系でフィールドスタディが実施された。基調講演では、森づくりフォーラムの内山節代表理事が日本古来の伝統的な自然観・社会観・関係論・自然信仰等について解説さ

れた。支部報告では、本部他13支部の活動報告が予め冊子に記されてあり、補助的な説明が各支部からあった。日本山岳会高尾の森づくりの会による、高尾の山野の自然環境の保護・育成・復元に寄与する活動、宮城支部の風力発電事業による影響調査、多摩支部の水環境調査・三ツ峠等の保護活動・各種の植物観察会の実施、東海支部による環境省委託事業としての里山モニタリング調査活動などが特に関心を集めた。ＪＭＳＣＡでも全国自然の集いで毎年参加してきたが、視点の違う切り口に新鮮さを感じた。山梨支部からは、中村委員長の「写真が語る三ツ峠周辺の環境変化」が書面にて報告された。これに関連して筆者は、ニホンジカ被害について山梨の現況を報告し、環境省主導の全国規模の対策を早急に講ずるよう各団体と連携して要望すべきであると訴えた。

高尾の森でフィールドスタディ

終了後、夕食を兼ねて各支部との懇親会が催された。今回の集会には橋本会長も参加され、その大変気さくなリーダーぶりに会話も盛り上がった。席上、次年度6月に多摩支部と合同の高山植物の観察会を企画することになった。

２日目はそれぞれ車で移動し登山口から約1時間歩いて、高尾の森ベース小屋へ集合した。会の活動拠点になる大変立派な小屋だ。何班かに分かれ植林地に案内される。戦後、復興資源としてスギ・ヒノキ等針葉樹が全国的に植林されたが、本来の日本の山林に戻すため針葉樹を伐採し広葉樹を50％までに復元する植林活動を行っているという。敬服するばかりであった。

自然保護について深く学ぶことができたことを実感し、世界一の登山人口を誇る高尾山の裏山を後にした。

第10回中部ブロック4支部交流会に参加して

遠山　若枝

ようやく新型コロナも5類に移行となり、しばらく中止していた4支部交流会が長野県安曇野市豊科南穂高に

あるビレッジ安曇野で開催された。山梨支部からは北原支部長、磯野副支部長、古屋事務局長、大澤夫妻、黒沼、遠山の7名が参加した。次年度は山梨支部が中心になることになっているので、多くの支部会員の参加が望まれる。越後支部6名、静岡支部7名、長野支部27名余が安曇野市のビレッジ安曇野に集合した。宿泊所は豊科の駅近く。宿泊施設の隣には田淵行男記念館やあずみ野ガラス工房があり、周囲は様々な観光施設があった。

交流会の講演では元田淵記念館の館長の古幡開太郎氏や元学芸員の財津達弥氏が田淵行男との出会いや功績、蝶の研究家・写真家としての田淵行男を紹介した。私は以前に田淵記念館に何回か訪れたこともあり、久しぶりだったので新たな感動があった。懇親会では久々の交流会でもあり4支部の会員と大いに語りあい、記念写真等を撮りあうなどした。

翌日の山行は信濃支部の案内で長野自動車道をくぐり、東側の山域の光城山から長峰山に登った。前日は中央道諏訪湖付近から雪まじりの雨模様だったので登山は大丈夫かと心配したが、朝見ると西の中央アルプス山系は真っ白だったものの、東の山域は特に雪は積もってはいないようで安心した。整備された登山道を歩き、光城山へ40分ほどで着いて古峰神社で一休止。日陰の草むらには昨日の雪が少し積もっていたが歩くには支障がなく安心した。何回か林道を横切って長峰山につくと広い駐車場があってがっかり。頂上には大きな絆のモニュメントと時代劇に出てきそうな大展望台があり、多くの市民や観光客が訪れていて人々の憩いの場所となっているようだった。良い天気だったので展望は大変よく、蝶ヶ岳から常念岳、槍ヶ岳も間に頭を出していて、360度の展望の素晴らしい景色に感激した。下山もベテランの信濃支部の方が近道を案内してくれて楽しい道中だった。

4年ぶりの再会

宿泊施設に戻って、昼食にカツカレーを頂き、来年の山梨での再会を約束して散会した。多くの信濃支部の会員が快く接待してくれた交流会だった。次回開催の山梨支部も頑張って迎えなればならないと思った。

随想・書評

学校登山を支える

矢﨑　茂男

昨年『甲斐山岳』14号に、「学校登山をつなぐ」と題する原稿を、三枝小淵沢小校長からいただいて掲載した。小淵沢小で65年間、連綿と続いている編笠山登山についての歴史・現状・今後の方針などについて紹介する貴重な論考である。県内の大半の学校が、登山から「撤退」する中、小淵沢小がこの行事を続けている理由が語られていて興味深い。理由の第一は、登山が有する教育的価値を学校が重視している点、第二は地元山岳会や保護者の支援が容易に受けられる点であるという。詳しくは14号の記事をお読みいただきたい。

私は、一昨年まで38年間、小学校教員として主に峡北地区の学校に勤務した。就職した昭和の晩期、峡北地区の小学校では多くが学校登山を実施していた。主に夏の林間学校で活動の一つとして行っていた。私の最初の赴任校でも、5・6年生が瑞牆山と飯盛山に隔年で登っていた。飯盛山はハイキングの領域だが、瑞牆山となるとそれなりの安全対策が必要である。しかし、私の記憶に登山の専門家の姿はない。職員の引率だけで登ったのである。2回目の瑞牆山登山の際、下山中に体調不良を起こした子供が全体についていけず、私がサポートしながら下ったことがあった。瑞牆山荘前にたどり着いた時、教頭が私たちを待っていた。他の子供たちと職員は先に学校へ向かったという。「日程を遅らせるわけにはいかなかった。勘弁してくれ」。勘弁してくれと言いながら、教頭は笑っていた。このようなことは間々起きることで大した問題ではないと言わんばかりである。私がサポートを誤って、この子どもを連れ帰ることができなかったら、どうするつもりだったのか・・・。

おそらく、当時の学校の多くは、このような極めて大雑把な計画に基づく登山を実施していたものと思われる。転任した学校では八ヶ岳南麓を巡る遊歩道をハイキングした。その次の学校では再び瑞牆山へ登った。さらに次の赴任先では、毎年飯盛山へ登った。いずれも引率者は職員のみで、ＡＥＤは普及前のことで論外だが、レスキュー用のロープ類の携行はなく、全く「素手」での学校登山だった。

大正2年8月、信州北伊那の中箕輪尋常高等小学校高等科の遭難事故は痛ましい。赤羽長重校長はじめ、生徒、同窓会員合わせて11名が、木曽駒ケ岳の稜線で低体温症のために死亡した。新田次郎がこの事故を題材に『聖職の碑』を著し、遭難の実相とともに教育・教師の本質を問いかけた。この事故は、当時の気象予報技術では予測不可能な台風が襲来したことや、避難小屋が損壊激しく風雨をしのげなかったことなどが大量遭難死の原因とされる。しかしこれらと同じく重大な要因は、山の専門家である案内人を連れていなかったことである。案内人がいれば、小屋損壊の情報がもたらされて緊急下山の判断が下された可能性はある。さらに重大なのは、下見をしていなかったことである。この安全配慮の怠りは初歩的・致命的な失態である。

その後、昭和に時代が移ると、学校登山は戦争遂行のための錬成登山へと形を変えた。この大量遭難の教訓は隅に押しやられて、心身の錬磨に主眼が置かれていったと思われる。その流れが、山梨県の峡北地域において、昭和の晩期まで続いていたとしたら、これは実にオメデタイことである。杜撰な計画に基づいた登山であっても長い間事故が発生しなかったために、専門家の引率要請、レスキュー道具の携行等に目を向けることなく時間が過ぎていったのではないだろうか。かつての学校登山の体験が、そのような理解を促している。

※

北杜市では、市を取り囲む多くの名山に関心を持ってもらうため、令和三年に「北杜やまのうた」を制作し、市内の小学校で日常的に歌うことにした。また、すでに学校登山を実施している小淵沢小・白州小以外の学校でも、地元の山を目標にした学校登山を実施するよう呼びかけられた。この呼びかけに応じて各校は可能な範囲で登山またはハイキングを実施しているが、本格的な登山を始めたのは須玉小のみである。

この学校では、校区にある横尾山を目標の山に据え、S校長が中心になって緻密な計画書を策定した。この中に「安全確保のため、専門家数名の支援を要請する」「怪我、病気に備えて看護師の随行を求める。看護師は登山の経験のある人材を確保する」などの留意事項が記されている。S校長は小淵沢小で長く学校登山を経験してきた教員で、学校登山が配慮すべき安全対策を熟知しているのである。

第1回横尾山登山は、令和4年10月に実施された。参

加児童は6年生45人。登山経験豊富なH看護師が随行し、地元に住む日大山岳部OBのNさんと筆者が「専門家」として引率した。計画書の日程・コースタイムを忠実に守り、周囲に広がる大展望を解説し、奥秩父を横断する送電線と巨大鉄塔の功罪に目を向けながら、楽しく学校登山を支援した。

第2回は、翌令和5年10月中旬に実施。前年と同じサポートスタッフが参加した。今回も天候に恵まれ、子供たちは稜線からの大展望に歓声を上げた。山や自然に触れて感性を磨くことができたものと思う。

小淵沢小の学校登山が還暦を過ぎた理由の第一は、「登山が有する教育的価値を学校が重視している点」にある。この認識を、再び多くの学校が思い起こしてほしい。働き方改革が学校の優先すべき課題であることは十分に理解している。教員の過重負担にならないような工夫を凝らしながら、山国・山梨ならではの登山を通じた教育活動が実践できれば、山梨の教育は一層輝きを増すことになるだろう。

山梨支部員としての「専門性」を生かして、地元の学校登山を支えていきたいと思う。

講演会「これからの山岳小説」を聴講

小澤　亮

令和5年12月3日、講演「これからの山岳小説」を聴くために北杜市武川町のホールに出かけた。甲斐駒や鳳凰山が指呼の間に聳え、山の講演会を開催するにふさわしい会場だと思いながら入場した。

この講演会は、山梨文芸協会が主催。新型コロナの影響で、講演会は4年ぶりの開催だとのことだった。講師は山岳小説などを手掛ける樋口明雄氏で、会場のすぐ近くにお住まいだという。樋口氏は大藪春彦賞をはじめいくつもの文学賞を受賞し、作品は１００冊を超え、ジャンルは山岳小説の他、冒険小説、ＳＦ、ゲームブックなど多岐にわたる人気作家であると同時に、山梨県自然監視員を務める自然愛好家でもあるとの紹介に驚いた。

講演の冒頭で、樋口氏がプロ作家として自立するまでの人生行脚が語られた。偶然の出会いが樋口氏の人生を方向づけたというエピソードが興味を引いた。本論では、「山を舞台とする小説」を山岳小説と規定するとの前提の下に、新田次郎の小説群がこのジャンルの嚆矢であり、井上靖の『氷壁』、北杜夫の『白きたおやかな山』、

松本清張の「遭難」、森村誠一の『日本アルプス殺人事件』などが新田の後に続き、このジャンルを一般化したと解説した。その後、多くの作家が登場し、興味深い作品を上梓してきたとして、次のような作家・作品が紹介された。

太田蘭三『脱獄山脈』、梓林太郎『九月の渓で』、沢木耕太郎『凍』、高村薫『マークスの山』、谷甲州『遥かなり神々の座』、高嶋哲夫『ミッドナイト・イーグル』、真保裕一『ホワイトアウト』、笹本稜平『春を背負って』、馳星周『神奈備』、夢枕獏『神々の山嶺』、ボブ・ラングレー『北壁の死闘』、デズモンド・バグリー『高い砦』

樋口氏の数多い作品の中で、山梨県民に特に身近で支持されているのが、北岳を舞台にした「南アルプス山岳救助隊k―9」シリーズである。白根御池小屋に隣接して設けられた警備派出所で遭難救助に当たる救助隊員と救助犬の物語である。ミステリーや冒険の要素も取り入れた重層な小説である。

樋口氏はこのシリーズも含めて、一層意欲的に創作に取り組んでいきたいとした。その上で、これからの山岳小説の方向性として次のように結んだ。

「山岳文学は特殊な分野であり、誰でも手が出せるものではない。一方で小説家志望者は少なくはなく、山岳小説を手掛ける人も増えてくるだろう。山岳小説の醍醐味は面白さであり、思想性を問題にする必要はない。純文学とは一線を画す分野だと理解して、創作に向かっていきたい、また向かっていってほしい」。

文学とは人を救うものであると同時に、楽しみをもたらしてくれるものである。このことを再認識した講演だった。

（筆者は北杜市立小校長）

「蘆川の谷」を読んで
（第64回木暮祭の後で）

渡辺　峯雄

第64回木暮祭で、「木暮理太郎と尾崎喜八」と題するミニ講演を、矢崎茂男氏より頂いた。講演では、木暮理太郎が抱く自然を通した人生感と木暮理太郎を先生と慕う詩人尾崎喜八との共鳴が解説された。ともに山旅を通して自然を感ずる時の繊細で豊かな感性の持ち主。又山村で生活する人々の間に温かな心を感じ、そこに人とし

て生きる喜びを享受しているとの指摘があった。

尾崎喜八の『山の絵本』の中に「蘆川の谷」（昭和８年作）という随筆が有る。蘆川は、御坂山系黒岳を源流とし嶮しい渓谷を形成しながら我が町市川三郷町にて笛吹川に合流している。この随筆の山旅は、河口湖ホテルを出発し、大石の集落より大石峠に登り富士を撮影し蘆川村へと下りて投宿した時の様子を記している。メンバーは日本山岳会、霧の旅会の武田久吉、河田楨、尾崎喜八の三人である。大石峠は、今も目の前に迫る富士の姿を写真に収める絶好のポジションであり私にとって最も好む場所でもある。こんな事が随筆「蘆川の谷」を一層身近に感じさせる存在にしている。

本文の前段では峠より蘆川の谷に下りる際に受けた、釜無より甲府盆地を吹き抜けた突風が舞い上がり大混乱を起こす様子が少し大げさのようだが、鋭く観察され、下り着いた上蘆川の集落では穏やかな風景が精細なスケッチの如く描かれている。１００年近く前のその情景はさほど現在と違いが無いように思えて何となくほっとする。後段蘆川村では、投宿の為の宿探しの様子を描いている。最初に飛び込んだ宿では、主人の不愛想で要領の得ない不快な応対に遭遇し、愛の薄い人としての生き方の一面を映し、酷評している。次に訪れやっと投宿かなった宿では、一軒目とは相反し宿の家人等より頂いた沢山の好意と真心のこもった応対に、人のなすべき大切な事への喜びと感謝を記している。

「蘆川の谷」の随筆の中にもミニ講演で解説された木暮理太郎と尾崎喜八との間に共鳴している自然を愛する豊かな感性と観察力、又自然を通して生きる事への喜びが生き生きと描かれていた。再読しての感想である。

追悼

温厚な先輩・山本様の思い出

堀口　丈夫

山本　稔さん　２０２３（令和５）年４月28日死去。
会員番号７５１７

山本様との出会いは、昭和37年国鉄甲府車掌区に配属されスキー部に入部した時のことです。部員20名ほどの先輩の中に、山村正光様、石垣政雄様、そして山本様がいらっしゃいました。

スキー部は毎年、白馬、岩岳、栂池で合宿を行いました。山本様は1級の資格を持つ熟練スキーヤーで、丁寧に指導していただきました。温厚で親切で、面倒見のよい先輩でした。

長年、春の木暮祭を裏方で支えたのが、これらのメンバーでした。小暮祭・記念山行の打ち合わせや反省会は、必ず山村様のご自宅で行われました。酒を酌み交わしながら、いつも長いこと語り合ったことが懐かしく思い起こされます。

茅ヶ岳山頂直下の深田久弥先生終焉の地にあった木柱を、山村様が用意した石柱に建て替える作業を山村様、石垣様、山本様、私の４人で行ったことも懐かしい思い出です。石柱・コンクリート・水・スコップ等を担ぎ上げた、なかなかの難工事でした。

山本様の奥様も山好きで、何度もご一緒しました。ご夫妻との山行は十文字峠が最後で、５年ほど前から連絡が取れなくなっていました。お二人とも体調に問題があったのでしょう。

この度の訃報に触れて、山本様の温顔が何度も浮かびました。ご冥福をお祈りいたします。

「なっ、丁度よかったら！」

秋山　泉

山寺　義雄さん　２０２３（令和５）年10月19日死去。
会員番号５６８７

井筒屋醤油株式会社の専務として、長兄で社長の仁太郎氏と共に、韮崎市の老舗「井筒屋」の暖簾を、長年にわたり経営してこられた。また二人とも、故郷の山々を深く愛して、多くの頂にその足跡を残すとともに、大自然の素晴らしさの紹介に努め、地域の青少年や後輩の育

成に尽力された。さらに兄弟で、地元の地域山岳会「白鳳会」の会長を長く交代で務め、義雄氏（以下、山寺先輩）は山梨県山岳連盟会長をも兼務し、多くの後輩から慕われ敬愛されていた。

昭和62年、白鳳会創立60周年記念事業に海外遠征を計画。初の試みにどの山域を選んだらいいのか迷った際、山寺先輩が、「おい、マレーシアのボルネオ島、キナバル山はどうだ？　高さも４１０１ｍ、丁度いいど」と提案。衆議一決、「よし、やろう」ということになった。その年の９月23日午前７時30分、13名の遠征隊は全員登頂に成功。すばらしい成果となり、山日新聞紙上にも大きく掲載された。

山寺先輩は、時の会長・二塚謙三先輩と一緒に最後にゆっくりと登頂された。それまで11人のメンバーは誰も頂を踏まなかった。二人がピークに立ってから次々とピークを踏み、全員で力限りの万歳三唱。歓喜のひとときであった。山寺先輩は言った。「なっ、丁度よかったら！」

山寺先輩は甲府一校のＯＢで、私の先輩であった。当時私は山好きで、単独行ばかりしていた。父が随分心配して、懇意にしていた山寺先輩に相談。白鳳会入会という羽目になった。入会には会員２名の推薦が必要で、その一人にもなっていただいた。公私ともに大変お世話になったが、なんのお返しもしないままで、恐縮至極、汗顔の至りである。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。　合掌

新会員紹介

ごあいさつ

望月　啓治

山里で生まれ、子どもの頃は山を遊び場にしていた記憶がありました。長じて20代半ばまでは、どうして山梨にはこんなに山があって東京と平地で繋がっていないんだろうと羨んだ時もありました。

就職すると休日の登山は癒しであることを知り、ある山岳会に入りました。大した登りもせずズルズルと続けていましたが、少しは幅を広げたいなと思っていたところに入会のお声がけをいただきました。私ごときに歴史と伝統のある日本山岳会はとても敷居の高い団体と思っていましたので光栄です。

以前は登ることばかりでしたが、時の移ろいとともに、植物や動物、地質など自然はいろいろな気づきを提供してくれて、山は飽きの来ない遊び場であることを再認識しています。

長くは続けているものの、ほとんど成長していないので、先輩たちの話にはいつも感銘を受けますし、最近では年下の人達にも教えをいただくようになってきています。今後ともよろしくお願いいたします。

山梨の山々への想い

遠藤　辰也

十五年前に会社の同僚に誘われていきなり富士山に登りました。苦労の末の達成感と、ご来光の美しさで人生観が変わりました。その頃は仕事も大変でストレスも多かったのですが、以降の様々な山を歩くうちに心が洗われていきました。

中でも特に山梨の山々に惹かれていきました。どこからでも富士山が見えることの驚き、八ヶ岳や甲斐駒、鳳凰三山の美しい山容。空の青さと星の数。気がつけば山梨百名山を80座登っていました。

これまで冬は低山ばかり登っていたのですが、雪山にも興味が湧いてきました。でも全く知識もなくどうしようか悩んでいたところ、私の「山の師匠」から日本山岳会の雪山ステップアップ講習を紹介していただきました。基礎的な事から優しく丁寧に教えていただき、硫黄岳山頂では初めて山で感動して泣きました。

もっと感動したい、先輩方から学びたいと思い日本山岳会にお世話になることにしました。東京在住ですがもちろん山梨支部です。これからはボランティアやレインジャー等で山に恩返しもしたいと考えています。よろしくお願いいたします。

回想

東条　真百合

山梨に生まれ育ち、中学3年生の学校登山で、鳳凰三山の地蔵ヶ岳に登ったのが最初の登山でした。山頂から見た甲斐駒ヶ岳や北岳大樺沢の雪渓。限りなく続く雲海。雲の上の富士山など、見たことのない絶景が美しすぎて今でもよく思い出します。この経験が山を好きになった原点だと思っています。

大学では山岳同好会で、女子3人でパーティーを組み登っていました。夏恒例の合宿は剣岳。4年生の時は、一週間定着で登攀をした後、後立を縦走。毎日クタクタになりながらも、充実した山行でした。可憐なコマクサの名を教えてもらったのはこの時です。

卒業後は社会人山岳会の「G登攀クラブ」に入会。1983年女子登攀クラブのブータン遠征を皮切りに7回の遠征を重ね、日本山岳会会長の橋本しをりさんとは4回一緒に行きました。橋本さんが隊長で登った、GⅡ峰（8035m）は女性5人が同時登頂した記録があります。

今まで山登りを続けて来られたのは、山仲間のおかげです。この度山岳会に入会させて頂き、新たな出会いを楽しみにしています。これからどうぞ宜しくお願い致します。

県から県へ　山から山へ

近藤　美奈子

山を見て綺麗だと思う事はありましたが、登りたいと思った事はありませんでした。しかし、3年半前の夏、テレビで沢登りのシーンを見て、突如としてやってみたいと思ったのでした。そして、同時にクライミングもやろうと。

当時住んでいた新潟市の山岳会に連絡すると、先方は、「山も登ったことがないのに何で沢？　えっ、クライミング？」と戸惑っておられましたが、とりあえず道具を揃えて行きましょう、とのこと。早速、五頭山の沢登りと新発田の外岩へ。沢登りでは、一般登山道とはまるで異なる深い森と水と苔、そして藪漕ぎ。クライミングは、初めて死を覚悟した恐怖と大興奮。ここから、私の人生は一気に変わり始めました。

その秋、初めてのソロ登山、唐松岳へ。初めての北アルプスに一目惚れ。その冬、白馬へ引っ越しました。白馬では30年ぶりにスキーを再開しようと、無理を言ってスキースクールに入れて頂きました。

こうして長野の山々を登り滑りする中で、なぜ山梨支部へと思われたことでしょう。それは、山梨の山も登ってみたかったから、そして花をじっくりと眺めながら山を楽しみたいと思ったから。そんな私の要望にピタリとハマったのが、山梨支部の年間山行計画だったのです。ほうとうを食べたり、スミレに会いに行ったりと、魅力

的な山行内容でした。実際に入会させて頂いたところ、山や花や歴史に詳しい先輩方がたくさんおられ、改めて山の奥深さ、楽しさを知ったのでした。

松本に住んでいるため、毎回の参加は難しいのですが、細く長く山梨支部の皆様と一緒に時を重ねていけたらと考えております。皆様、どうぞ宜しくお願い致します。

「登山基礎講座」を受講して入会

渡辺　和美

「やまなし登山基礎講座」を受講した事で、より安全で楽しい登山をする心構え、沢山の知識を得ることができて良かったと思います。

10年位前に、友達に誘われて登山を始めたものの、年に数回山に登り、山頂の景色を楽しむ程度で、山歩きの楽しみは感じていなかった様に思います。

山梨支部の実践登山、支部山行に参加させて頂きました。可愛らしい草花を見つけたり、四季折々の山の景色に感動したり、時には危険を感じることもあったりと、同行した諸先輩方から様々なご指導をいただき感謝しています。急登を歩き山頂に着いたとき必ず笑顔にさせてくれ、どんな山でもその山独自の絶景で楽しませてくれ、また無事下山したときに満足感を与えてくれる。これらは私にとって登山の魅力だと思います。

まだ初心者で、周りの人に迷惑をかけない様にする登山で余裕のない私ですが、より安全で楽しい登山、様々な山にも挑戦して行きたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

日本山岳会に入会して

中田　雅弘

２０２３年6月11日、東チベットの片隅で私は雪雲の中に消えていく巨大な岩峰を見上げていた。ここは未踏峰へのアタックキャンプ（標高４８３１ｍ）。昨日より大量の降雪。午前11時、隊長より撤退との指示が下る。この大雪では雪崩と落石のリスクを回避するのが困難との事だった。その時、私の心はなんとも不思議な心境に襲われた。それは残念な気持ちと不安から解放されたという安心感とが入り混じった複雑な心境だった。不安とは「果たしてこの雲の中に消えていく岩峰に自分の技術

と体力で登攀できるのだろうか・・」という感情だ。
日本山岳会への入会を決めたのはもっと自分の技術を磨きたい。そして昨年の未踏峰で感じた不安に思う心を乗り越えて行きたい。という欲求とスケッチ同好会やスキー同好会などもあり全国的に多様な人々との出会いにも期待できると言うことからである。
昨年、四川省の中日友好会館で館長より「もっと山梨県との民間交流の柱を太くして行きたい」とのお話を頂き、自分としても日本山岳会の立場から何かお役にたてることがないかと模索しながら、まずは山岳会の催しに出来る限り参加させて頂き信頼と友情の絆を紡いで行きたいと念願しています。まだまだ未熟な私ですが何卒宜しくお願いします。

事務局報告

古屋　寿隆

令和５年度（２０２３年度）

●理事会・総会など（議題ほか）

令和５年（２０２３年）

４月22日　理事会（定時総会議案、支部山行実績、第９回やまなし登山基礎講座、新入会員向け登山届説明会）

４月22日　定時総会（令和４年度事業報告・決算、令和５年度事業計画・予算、報告事項、支部員向け通達ほか）

５月10日　理事会（第９回やまなし登山基礎講座、支部山行実績・予定、第４回家族登山、山岳古道調査、新入支部員登山届ほか説明会、支部通信14号発行、懇親会、山岳祭補助金申請、田部祭）

５月23日・25日　新入支部員登山届説明会・懇談会（登山届フローチャート説明ほか）

６月14日　理事会（第９回やまなし登山基礎講座、第４回家族登山、登山届説明会・意見交換会、役員分掌、ホームページ・ＳＮＳ発信、支部通信・『山岳』原稿、中期支部山行計画、山岳古道班別会議）

７月12日　理事会（第４回家族登山、第９回やまなし登山基礎講座、中期支部山行、会費納入、新入会員懇談会、ＧＯＴＯ山岳祭）

８月９日　理事会（第４回家族登山、第９回やまなし登山基礎講座、エクアドル富士山登山、中期支部山行、山岳古道調査）

９月13日　理事会（第９回やまなし登山基礎講座の内容、木暮祭・記念登山、支部山行実績・計画、役員の分掌、山岳古道調査）

10月11日　理事会（やまなし登山基礎講座アンケート分析、木暮祭・横尾山記念登山、支部山行実績・後期支部山行計画、山行委員会の開催、支部通信第３期15号発行）

11月８日　理事会（家族登山・やまなし登山基礎講座・木暮祭の総括、後期支部山行・会員山行計画、忘年会・新年会・総会開催日程）

11月22日　山行委員会（令和６年度支部山行・会員山行計画案、委員募集）

12月7日　理事会（令和6年度事業計画・予算・山行計画・定時総会案、第11回中部ブロック交流会山梨大会、第65回木暮祭）

令和6年（2024年）

1月10日　理事会（令和6年度事業計画・予算、役員改選、支部山行計画、第11回中部ブロック交流会山梨大会、第65回木暮祭、『甲斐山岳』第15号発行）

2月14日　理事会（役員改選・職務分掌、支部山行計画、第11回中部ブロック交流会山梨大会、第65回木暮祭、『甲斐山岳』第15号発行）

3月13日　理事会（令和5年度事業報告・決算、令和6年度支部山行詳細案、定時総会議案・役員・委員会人事案）

●支部行事など

※支部山行：公募登山、会員山行：支部員対象登山、家族登山：子どもと家族対象登山

令和5年（2023年）

4月8日　支部山行（金時山・神奈川県）支部員6名参加、9日　支部山行（大栃山・笛吹市）7名（支部員6名）参加、16日　支部山行（茅ヶ岳・甲斐市・北杜市）10名（支部員8名）参加、16日　第42回深田祭（深田祭記念登山・韮崎市）支部員16名参加、23日　会員山行（十二ヶ岳・笛吹市）6名参加、29日　支部山行（西沢渓谷・山梨市）10名（支部員9名）参加、29日　第6回田部祭（西沢渓谷・山梨市）13名参加

5月4～5日　会員山行（蝶ヶ岳・北アルプス）荒天中止、14日　支部山行（小富士・幻の滝）荒天中止

6月3日　支部山行（霧ヶ峰・鷲ヶ峰・長野県）12名（支部員11名）参加、4日　支部山行（ロープワークとハイキングレスキュー技術講習・甲府市）支部員6名参加

7月22～24日　会員山行（北穂高岳・北アルプス）3名参加、29日　支部山行（毛無山・身延町）中止

8月11日　第4回家族登山（吐竜の滝・北杜市）29名（支部員8名）参加、18～20日　会員山行（奥穂高岳・前穂高岳・北アルプス）中止

9月9、10日　支部山行（小太郎山・南アルプス市）

支部員6名参加

10月15日　支部山行（横尾山・木暮祭記念登山・北杜市）雨天中止、15日　第64回木暮祭（金山平・北杜市）30名（支部員15名）参加、21日　会員山行（鶏冠山・山梨市）増水中止、29日　支部山行（愛鷹山・静岡県）18名（支部員6名）参加

11月3日　支部山行（源氏山・富士川町）中止、25日　支部山行（白水山・南部町）8名（支部員4名）参加

12月17日　支部山行（大菩薩嶺・甲州市）10名（支部員5名）参加

令和6年（2024年）

1月7日　支部山行（沼津アルプス・静岡県）9名（支部員8名）参加

3月2、3日　支部山行（富士山雪上訓練・富士吉田市）6名（支部員4名）参加、24日　支部山行（城峰山・達沢山・笛吹市）、31日　支部山行（三方分山・甲府市）

雪山入門ステップアップ講習　支部山行

第1回2月4日（北横岳・長野県）13名（支部員4名）参加、第2回3月3日（縞枯山・長野県）支部員5名参加、第3回16～17日（天狗岳・硫黄岳・長野県）

●山岳古道調査委員会活動（金峰山御嶽道調査班／南アルプス北部山岳古道調査班ほか）

令和5年（2023年）

(1)金峰山御嶽道調査班　関係団体ほかとの情報交換・収集

(2)南アルプス北部山岳古道調査班　9月30日～10月1日（転付峠～二軒小屋）

(3)富士山吉田口登山道　11月3日（北口本宮浅間神社～馬返～六合目）

●山梨県山岳レインジャー活動

令和5年（2023年）

5月18日　日向山（探索調査）、古屋・北原・上田・臼田、ユキワリソウ・クモイコザクラほか

6月10日～11日　鳳凰山・地蔵ヶ岳（定経路②調査）、古屋・手崎・近藤、カモメラン・イチヨウランほか

6月18日　三ツ峠（探索調査）、磯野・上田・平松・

石澤、カモメラン・アツモリソウ・キバナノアツモリソウほか

7月1日～2日　北岳（定型路②調査）、古屋・服部・荻野・平松・岩間・近藤、ミヤマハナシノブ・イチヨウラン・タカネヤハズハハコ・キタダケヨモギ・クモマナズナ・ミヤマムラサキほか

7月8日　八ヶ岳三ツ頭（定型路②調査）、古屋・北原・上田・服部、ニョホウチドリほか

●機関誌等発行

令和5年（2023年）

6月30日　「支部通信」第3期第14号

12月14日　「支部通信」第3期第15号

令和6年（2024年）

3月31日　『甲斐山岳』第15号

●会員異動

入会

会員番号17044　黒沼　英美（準会員から）

会員番号17059　上田　謙治（準会員から）

会員番号17077　高橋　みゆき（準会員から）

会員番号17099　望月　啓治

会員番号17110　遠藤　辰也

会員番号17204　東条　真百合

会員番号A0528　近藤　美奈子

会員番号A0549　渡辺　和美

会員番号A0582　中田　雅弘

退会

会員番号7517　山本　稔（令和5年4月死亡）

会員番号5687　山寺義雄（令和5年10月死亡）

令和5年3月末日退会者3名は前号に記載

《日本山岳会山梨支部・支部員名簿》

（2024.3.31 現在・78 名　会員番号順 ＊印は永年会員）

会員番号	氏　名
2525	中尾　正武＊
4548	今澤　　寛＊
5350	浅川　瑞穂＊
5657	清水日出勇＊
7299	許山　　隆
7728	久保田明宗
7730	内藤　順造
7831	堀口　丈夫
8064	望月阿香実
8145	梅本　　実
8334	小林　啓助
9089	荻原　賢司
9336	羽田　政人
9634	滑志田　隆
10920	深沢　健三
11028	薬袋　興児
11326	斎藤　英子
11350	足立　英二
11352	小宮山　稔
11408	斎藤　忠文
11518	所　　一路
11652	角田　　元
11823	秋山　　泉
12069	長沢　　洋
12111	中田　一郎
12213	鈴木　勝彦
12396	遠山　若枝
12561	古屋　寿隆
12569	磯野　澄也
12913	青木　　茂
13443	中村　光吉
13669	矢﨑　茂男
13816	鈴木　伸介
14065	北原　孝浩
14263	平松久美夫
14440	露木　弘光
14653	萩野有基子
14785	小杉　秀夫
14821	大澤　純二
14827	野口　健介
15517	堀内　久光
15569	渡辺　峯雄
15577	川手　一正
15720	小宮山千彰
15833	末木佐登子
15958	大澤さな枝
16140	長坂　公貴
16210	池田新二郎
16268	臼田　昌美
16290	荏原由美子
16499	窪田　光一
16691	小嶋　数文
16693	河野　芳尚
16730	中川惠美子
16760	川島万里子
16786	平松　清子
16815	高本　英明
17000	服部　俊樹
17044	黒沼　英美
17059	上田　謙治
17077	高橋みゆき
17099	望月　啓治
17110	遠藤　辰也
17204	東条真百合

以上　正会員 64 名

A0332	相川　　修
A0404	井田　智子
A0405	小川　基子
A0438	手崎喜美子
A0449	石澤　貴子
A0493	鶴田　陽子
A0505	岩間　明子
A0506	荻野　重行
A0514	日向　直子
A0515	鈴木　大介
A0516	飯島　典子
A0528	近藤美奈子
A0549	渡辺　和美
A0582	中田　雅弘

以上　準会員 14 名

あとがき

ようやく感染症の影響から解放された。再開した4支部交流会では、懇親会・記念登山を通じて旧交を温めることができた。「平穏」の大切さを実感した象徴的な事業だった。しかしながら大国の理不尽な侵略戦争は今なお継続し、中東の新たな紛争も先行きが不透明である。国内では、元日に起きた能登半島の大地震が多くの方々の命と健康、日常生活を奪った。復興の道のりは長く険しい。

社会が「平穏」「平和」であってこそ、私たちは登山を楽しみ生きる喜びを味わうことができる。国内外に、このような状況が早く戻ることを切に願う。

今号では、新会員六人から入会挨拶文を寄せていただいた他、多くの支部員、支部外の方から原稿をいただいた。記してお礼申し上げる。

編集担当　矢﨑　茂男
題字　高室陽二郎
表紙　遠山　若枝

甲斐山岳　第十五号

令和六年三月三十一日発行

発　行　公益社団法人日本山岳会山梨支部
発行者　北原　孝浩
編　集　矢﨑　茂男

支部事務局住所
〒四〇〇―〇一一八
甲斐市竜王三〇二二―一　古屋寿隆方